

内戦36年…中米グアテマラ

地域リーダーら本学で研修

多くの学生と交流 — 狐崎教授を中心に

長期間にわたる内戦を経て復興を目指す中米グアテマラから、地方行政や市民社会のリーダーたち8人が、日本の戦後復興に学ぼうと国際協力機構（JICA）の招きで来日。10月26日から23日間、東京、広島などで特別研修が実施されている。本学でも教員による講義や学生との交流会が開かれるなど、有意義な国際協力の場が実現した。

21の先住民が存在する多文化多言語国家のグアテマラは、1961年から36年にも及ぶ悲惨な武力闘争が続き、先住民を中心に20万人が犠牲になり、数十万人が難民となった。96年、政府・ゲリラ間で和平合意が成立したものの未だ履行されずにいる。不安定な政治情勢、民族間格差がもたらす貧困、度重なる天災などで人々の暮らしは一向に良くならない。

この特別研修「地方公共政策の立案能力強化」は、JICAの中米支援委員会のメンバーで、グアテマラの民主化プロジェクト形成調査を進めている狐崎知己経済学部教授を中心とする同国研究者・協力者の尽力で実現。日本の戦後の経済復興や農村開発、地方行政などを学び、地方自治体、協同組合など地域発の活発な「草の根運動」も実地見聞する。

10月28日、一行8人は生田キャンパスを訪れ、コースリーダーを務める狐崎教授や同ゼミ生らと共に学内見学をしたあと、拍手と共に約200人の学生に迎えられ、ゼミナール・プレゼンテーションが行われた。

エルメン・ボスベリ・メリダ・メンデスさん（平和省総合農村開発局長）、マリア・グアダルーベ・ガルシア・エルナンデスさん（農村女性連合会会長）、エングラシア・レイナ・カバ・ソラーノさん（キチェ県イシュカン市副市長）が同国の現状と問題点、未来への夢をそれぞれの立場から熱っぽく語った。

引き続き開かれた懇親会で挨拶したピクトル・クック・パさん（ケクチ民衆団体「トウモロコシの心」理事）は「皆さんの顔や背格好を見ていると、我々と似ていて非常に親しみを感じる。だが、多民族国家グアテマラと決定的に違うのは、日本語という一つの言語でアイデンティティが確立されている点だ。戦後、経済復興を見事に成し遂げた日本に近づくのは短期間では困難かもしれないが、研修で得た日本の姿を国民にしっかり伝えていきたい」とこやかに語り、「日本が発展したのは、先祖代々からの文化と伝統を大切にしてきたからだ。さらに受け継いでいくのは、あなた方の役目だ」と次代を担う若者たちに期待した。

学生のグループインタビューも

本学教員の講義は、狐崎教授のほか原田博夫教授の「日本の地方自治と財政」、泉留維講師の「地域開発と地域通貨」、飯沼健子助教授の「アジアにおける地域開発」が行われた。

さらに各大学の学生が研修者にグループインタビューし、8人の「横顔」をプレゼンテーションによって認識し、国際協力を体験する交流会が11月3日、東京・渋谷区のJICA東京国際センターで開催され、専大生も参加した。

小林正典さん（経済3）は「上の世代から聞いた終戦直後の日本と非常に似た姿を聞くようで、とても興味深かった」。また、研修者に一部同行した、中南米留学経験がある石黒侑介さん（経済4）は、講義の反応、質問内容が学生とは違うことに興味を持ったと言う。「とてもありがたい体験だった」と研修の様子を話していた。



鮮やかな民族衣装に身を包んだグアテマラからの研修者のみなさん



研修者に学生がインタビュー（JICA東京国際センターで）

人文科学研究所と韓国・檀国大学日本研究所

学術交流協定を締結

人文科学研究所(林義雄所長)は、国際交流協定校である韓国・檀国大学の日本研究所との間で、学術交流に関する協定を結んだ。

内容は▽両研究所間の共同研究の実施▽所員の交流▽学術大会への相互協力▽学術情報及び学術資料の相互交換など。

10月8日に林所長がソウル市内にある同大学を訪れ、チョン・ヒョン日本研究所長と協定書を取り交わし、今後の協力を約した。

当日は、日本研究所主催国際学術シンポジウム(共通テーマ「日本の神と仏」)が開催され、これに講師として招聘された林所長の「鎌倉期日本語史料としての『足利本仮名書き法華経』」をはじめとする発表・討論の後、両研究所の交流協定書調印式が行われた。

これまで実施されていた長期交換留学プログラムや夏期留学プログラムにおける学生間の交流に加えて、今後は教員間における研究面でのさらなる交流が期待される。



協定書を取り交わす檀国大学のチョン・ヒョン日本研究所長(左)と本学の林義雄人文科学研究所長

留学生日本語スピーチコンテスト

李振全さんら10人が熱弁

第6回専修大学留学生日本語スピーチコンテストが10月18日、生田キャンパスで開催され、留学生10人が熱弁をふるった。

1位の座は李振全さん(中国、法1)が獲得。李さんは開カー番、「いま緊張しています。ヤッパーイ！」と会場を笑いに包み込んだ。「日本の若者はヤバイ、キモイ、チョーなどということばを盛んに使う。ことばは生き物だから変化するものだが、『ぜんぜん、大丈夫』という言い方をされると戸惑ってしまう。日本の伝統を受け継ぐためには、まず、美しいことばを守っていくことが大切だ」と、ユーモアたっぷりに訴えかけた。



1位の李さん



全出場者と大林守国際交流センター長(前列中央)ら審査員の先生方

参加者の日本語をチェックした学生チューターの紹介、専大北海道短期大学のスピーチコンテストに優勝した王夢陽さん(農業科学2)のスピーチも披露された。会場には審査の先生方、学生や地域の人々もリスナーとして聴講。それぞれのスピーチに盛んな拍手を送っていた。

2位以下の入賞者は次の通り＝敬称略。

▽2位＝朱擘(中国・商1)▽3位＝禹智賢(韓国・檀国大学・特別聴講生)▽入賞＝王¥外字(924b)(中国・経済1)／李大為(中国・商1)／安智勲(韓国・檀国大学・特別聴講生)／姚正清(中国・文学研究科修士課程1)／趙セロム(韓国・檀国大学・特別聴講生)／ファン・フン・ホァン(ベトナム国立大学・特別聴講生)／ヤン・アンジェラ(ニュージーランド・ワイカト大学・特別聴講生)
 司会＝チョンムルノフ・テムール(キルギス・商学研究科修士課程2)

専修グリーンディスカッション

英語で時事問題を討論

第35回専修グリーンディスカッションが9月18日、神田キャンパスで行われた。17大学が参加、労働問題をテーマに英語による討議が3時間、展開された。

英会話研究会(小林千佳代表・文3、部員29人)が主催する大会で、関東圏の大学のディスカッションとしては伝統ある大会の一つ。参加した各大学の英会話研究会のメンバーが6~7人一組でテーブルを囲み、時事問題をすべて英語で討議する。英語のスピーチに加え、プレゼン能力が要求される。



ホスト校としての役割を果たした本学英会話研究会のメンバー

今年の参加は、本学をはじめ東京大学、東北大学、青山学院大学、上智大学、早稲田大学などからの240人。深刻化する雇用、過労死といった労働問題をどのように解決したらよいかを議論した。

昨年に続き実行委員長として大会の準備、運営を務めた東正喜さん(法3)は「今年も熱の入ったディスカッションとなりました。半世紀にわたる英会話研究会のグリーンディスカッションの伝統を途絶えることのないよう、後輩に引き継いでいきたい」と語った。